



柳原金

終中

朝の暁も好まおひぬあふ

芭蕉

家女の泣きさへ世やなほ

大窪

卯月の未暮もあつて

旅のつらさをさへ

なほいまだ

芭蕉

昔も第一 移蔵のころも

なつと八雲山子 清貧の

句

子息あり

顔人、苦味うらまはれ給也

大雀

老庸

祐あま日とまゝくハ心ひかり

同

時多日月ハ梅乃意 兼也

芭蕉

家小眾あま日月ハ心ひかり

大雀

清くきくも年子香 泣て子奴

芭蕉

卯の列乃 松波切く 勢ハ云

大雀

蜀意 晴く 飛をいそハ

芭蕉

堂風々の せく 素子なり 晴る

大雀

きよ子く 心魚 亦あ

吉河の 心平 ちら

孝 終の つの 心 亦あ

あま 心 亦あ 心 亦あ

そも 心 亦あ 心 亦あ

名 終の つの 心 亦あ

白

おまゝやとくむの

おまゝの

比子の手乃先子

芭蕉

強念ハ松魚

大雀

子叙消り

芭蕉

水由

大雀

角の宿

子叙

落来る

芭蕉

記の

善子

大雀

館代

口つ

と

侍

學

芭蕉

目老やる路あり我由郭云
保くき子写書や古き歌
芭蕉

陽田風流

世儀ちくく夕飯巻て子親
芭蕉

言子結く京あつくも時を
芭蕉

記もくくそ日記せむ河原守
大窪

山差我あく

蜀鬼大歩江船をこくる目祖
芭蕉

依又ふく

歩子降る由美くくおほくもす
大窪

蜀鬼のあみ人のあわえ子
芭蕉

郭云あの中ある山守のあ
大窪

木くく終るも葉掃もあやめ
芭蕉

子親吾城のくく解おろ
大窪

鳥城雲の空生きくく郭云
芭蕉

道下もあは体合よほくあ
大窪

始るまきくね妻の起る屋敷

芭蕉

浪舟のり

一土所ノや尻舟ノ河ノ郭ノ云

大窪

一土所ノの江ノ橋ノ舟中ノ鬼

芭蕉

紀の川の舟ノ伴努よ始る

大窪

暁やまの歌の舟係のり

芭蕉

薩摩の舟お波とゆへ

郭云雲ハ海山ノ云

大窪

夢ノ先子誰ノ云ノ後郭ノ云

大窪

奈良のり

灌佛の日子生終あふ鹿子

芭蕉

あまの舟乃波舟のり通る藤子

大窪

灌佛や船手合する藤子の音

芭蕉

世よふのりものハ四月此佛

大窪

坐終おのり舟と佛の世よふ

同

卯の舟やうき舟舟のり

芭蕉

卯の巻や 全月此のめくみ 大雀

園賞ち大顛和尚あ

むつこのまあ 迂化志るま

海やまの心世せりるは先

乃らうそ角うあやま

物あひく卯の巻舞む 蕉の巻 芭蕉

其角う母のみ七日

卯の巻も母あき宿り 蕉の巻 同

ふ来くもま 卯の巻の一葉卯 芭蕉

庭も世子一葉此 卯の巻 大雀

知是る

杜あ 家子 卯の巻のおもひ 芭蕉

杜あ 故入い 卯の巻のおもひ 大雀

蕉子 巻行も 卯の巻の巻 芭蕉

赤巻 や 尾張城こせん 杜あ 大雀

手此くくあ 巻八焼 杜あ 芭蕉

いさつそと一又海一也来子なり

大雀

山崎宗鑑をまふしく近江殿の

宗鑑、海をさへ渡るるもつと

と遊るもはるあつと思ひやく

育るは海を舞まむのまつと

芭蕉

思ひたるもりも来子の一もみ

大雀

白く中雨の世の笑つら

芭蕉

笑けくくは子と知る美の雨

大雀

贈杜國

白来子子抱く蝶のうらみ

芭蕉

舟の張れとて遊てあや来子の

大雀

けの世はとらむもまゝの海人

か新迎さ細くえさるる

世の息先とらむか来子の世

芭蕉

まゝとらむ子孫の種よかつら

同

春前くあえく知る戸口

大雀

伊豆の國蛇ヶ小宮の糸染門

是も去年の秋より竹節

けり。り。あ。き。く。ま。の

枕を同くせむと尾張

の國まゝあ。か。し。ま。の

一。ま。ら。ま。ら。巻。こ

い。ま。も。子。種。ま。ら。り。其。子。枕

ま。ら。り。の。あ。り。目。の。乃

芭蕉

大雀

甲斐國山家ふり

り。約。の。ま。も。子。あ。く。さ。ま。ら。扇。の。式

芭蕉

一。交。座。を。あ。く。古。の。子。種。く

川。崎。也。人。く。送。り。来。り。て

錢。子。乃。り。を。き。ふ。ら。し。一

ま。の。種。あ。ら。り。ふ。つ。つ。お。あ。り。式

同

二。度。亦。あ。り。り。ら。其。ま。ら

桐。葉。の。あ。ら。り。を。ら。あ。り。

牡丹葉深渾くを如く蟬の必細か

芭蕉

蒼きくいく日有しそふ牡丹

大雀

贈桃隣新宅自画自後

電くくね家や牡丹の世り密

芭蕉

畠小路殿に保世に教寄

屋りくまのなまきり

月島一牡丹の世の下旗い

大雀

お音のと歌ハ字つゝ牡丹分

同

振提寺くく経真和尚の

御影紙拜一以目の元目

せびりくくさ思ひか

まき紫くく以目の常物くく

芭蕉

以目あし守くく子忌紫のあき

大雀

日光くく

あくくまき紫の葉の日の光

芭蕉

山ハくく自のあ也るあくく

大雀

清くもやぶらぬさく木と書

芭蕉

高きもの申し程く去ぬる禁山

大窪

空岩寺佛頂和尚の山居り

あらしを辨こく

木塚も庵ハ破く其基木立

芭蕉

法の寺あり

深き禁地を此橋ハきのふ

大窪

清淵や浪よりまよひたふ

芭蕉

葛山をさぐるう浪は戸口の船

大窪

幻住庵あり

先きのむ推の木もあまふ

芭蕉

卒崎あり

あか紫ありくつりつ朝の雀

大窪

春風の浪禁地ありつ音流

芭蕉

さくさく春葉こり程く虹の影

大窪

道阿何甘菜の梅をさる

| | |
|--------------|----|
| 母の家纏ふかけし藤のうね | 芭蕉 |
| なまやちしさいせいのま | 大窪 |
| るほくくをを画よる存心 | 芭蕉 |
| 這とる雪のまじりまき芭 | 大窪 |
| 暮子や真もも甲のれあ | 芭蕉 |
| 蔓草の坊るもきりお | 大窪 |
| 練負人を筆た暮四うれ | 芭蕉 |
| 先うぬハ勝ぬくはよまき | 大窪 |

綴生石少く

| | |
|-------------|----|
| 石の香ゆる子赤く家器 | 芭蕉 |
| 苔や竹の子藪の子老を | 同 |
| うをいしとくう老る菴 | 大窪 |
| 朝記をえよ苔れ老乃友 | 同 |
| 能かしの眼し家を以て子 | 芭蕉 |
| い溜りく草れま | 大窪 |
| 暮る日々油りせまらけ子 | 同 |

百 廿

う紀遠次家一々世子采古る

芭蕉

三日月如好も似る采古る

大窪

美もせぬ源山景と采古る

同

家々も神はえと采古る

同

三河生狩二村の采古る

同

采古るの由如く采るる之愛

同

懸てし六思はと里はり采古る

同

和より如す本曾也四月の様狩

芭蕉

舟子舟の照こり月は地月式

大窪

我家ハ蚊のちをさぬ是地走外

芭蕉

船遊舟子志舟也音や好みの由

大窪

舟中ましくと舞く好きうはに音

同

舟の子や雅き時の陰のまよ

芭蕉

さうかや華時や歌ひ好女

大窪

うつさうといふ人さ酔ふ洗

芭蕉

二三日おわつておもむけ

大窪

穂念子活くわけすし初魚

芭蕉

うらみろ淵さく

溜くハ淵又花もや夏のころめ

同

溜くハ淵又花もや夏のころめ

大雀

仙事子入のハあや草の口也書工

高きつゝ子もあう緋の深結

ふくる子鶴子録寸

あや草子入ハ結も書く子鶴の緒

芭蕉

懺えのこむ色は羅お橋の結

大雀

あや草子入ハ結も書く子鶴の緒

芭蕉

神農氏の像

不字のうめハ草道草蒲式

大雀

鯨中ふらふらふらむ影ひらみ

芭蕉

うらみろ淵さく

大雀

五月四日春園来馬を記す

あや草子入ハ結も書く子鶴の緒

总あや一あ子枯しりあ式

芭蕉

佐原三宮の白狐の寺

義経の老刀年寄り

とめく什物

存もた力も有子縁起紙幟

同

さくられ子隠道ぬもの中衛門の箱

同

さきのあつしよあまのあ月也

大雀

日乃らち中蔵さくあ月雨

芭蕉

夕ららのあつしよあまのあ月也

大雀

さくら色紙あつしよあまのあ月也

芭蕉

高橋のあつしよあまのあ月也

大雀

さくられ子あつしよあまのあ月也

芭蕉

けいこ子のあつしよあまのあ月也

大雀

さくら色紙あつしよあまのあ月也

芭蕉

光堂ハ七窓ちりせし

扉のあつしよあまのあ月也

霜雪ふたつら

石目島の降紙とて先づ堂

芭蕉

落梅香あけ

翠乳や色紙厚ける雪の如

同

羨望あけ

法師ハ雨の中もと年一折

大窪

余の志くくそゆるふ葉端

望望ハ雨よふ色半つら

望望やいつこ翠月のぬり乃

芭蕉

夕まや柳一むらけの雪の穂

大窪

石目島の雪とて先づ大井川

芭蕉

月子くる如や雪あけ月富士

同

望望ハ雨よふ色半つら

大窪

雪の葉端とて先づ雪あけ

芭蕉

石目島の雪とて先づ雪あけ

大窪

石目島の雪とて先づ雪あけ

芭蕉

朝字を真やうくり管 大窟

燕子くく刺をくつむ管式 芭蕉

走りゆく子の管をくつむり 大窟

管田管えん

この管田毎の月子競くえむ 芭蕉

松山のく申のほくくぬ管をくつむ 大窟

管をくつむ船頭酔く管をくつむ 芭蕉

くくぬ管をくつむ管をくつむ 大窟

くくぬ管をくつむ管をくつむ 芭蕉

管をくつむ管をくつむ 大窟

この境遠くくくくくく

管のくくく

蛇牛角やうくくく 芭蕉

くくくくくくくく 大窟

くくくくくくくく 同

其道をくくくくく 同

蛭牛 這山やんをきりく
一此のこむ山をよこつてり
同 大雀

山中送る

西を北馬の尿する枝り
雲の子れ鳥のふさよ西の雲
西のとぬきまをくろ廣るれ
うや中よふ飛とて西をさるる
同 大雀
同

西河行の錢か

権のむのふあゆ似よ本方の旅
うき人の旅もとあく本曾れ蠅
蠅の子ふ声のあまらる弟をが
大うこあさく火をまゝおれ虫
同 大雀

桑女白川をきり

雲雪の宿をよみ鶯の向よの坂
あ影やふふあくは同く深く
山宿の水鏡もあけぬ扉うり
同 大雀
同 芭蕉

小田さし水と妻を結ぶ水筋分 大窪

水筋等と人のことの中佐を治 芭蕉

とささく標守のなを等より 同

そこへ肥存うさへ肥氣あ

又ささく國をくつて此つひ

すまほし

うさ道中をも調りも总標 大窪

又新ひささの川乃船筋 芭蕉

あまのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころ

えんたの親ハ歩の筋よりあさり 大窪

西あさりこやそりあさり筋あさ 芭蕉

舟をゆきしそ筋の進むあさり 大窪

鴉のさしあさりささりささり 同

あさりささりささりささり 芭蕉

植ゆる一担の苗を戸口ぬ 大窪

津より流るるの柳ハ昔も今も同じ

あつゝ田の畔子孫の川の流れ

よもよもひと流るわけ柳の影

くそをききうけまうし

田一畝植くくらふ柳の影 芭蕉

東岳の石梁身はあはれぬ

只も身はゆるみとくふるまき田辺 大窪

奥あやうの白川小窪ニ

早苗うもふさやもさきりぬふ 芭蕉

西の東に先早苗も風の音 同

昔鶴の羽子あうける田子か 大窪

は流のくめや奥の田植うこ 芭蕉

悲る平よさきと湯ふくく田のあ 大窪

志の柳のこころあき捨るまをりて

早苗もるものもやむし志の柳 芭蕉

柳書のせきうへは志の柳も苗も 大窪

百五

築きしるの庵の田植持

芭蕉

尾張子入るの頃と

世と語り代捨小田の庵り

同

耕田の骨お致おしくと

こぼる著さしくくにあり

あり

田植るや言ふ言はさるる是

大雀

物くお家鴨のよきは園田のぬ

同

橋の香波汲る乃必しうれ

大雀

臨河臨やも橋も柔の白ひ

芭蕉

歩 瞻 日

少くはも竹植る日ハとの笠

同

歩 括くおをさるる庵の庵也

大雀

竹屋中を著乃小庭より、今く

け君其の踏捲きとておるり

あゝは竹橋の美ある致好む不

何れもふもふの如き海
高山の涼風を正目あしせむ
舟もあし舟も砕ちふおの
行有る名を捨給く地ぬせ
みるのほきあしうけのなり
きさしへのしき事をと替る
とふも又いふえ

くも捨く布るるのを受人り

大雀

手ぬうてハ本魂よめるの月

芭蕉

古きと守もぬ禁も夏の月

大雀

夏の月沸油うぢく赤坂や

芭蕉

杉風のさくくけふよ夏の月

大雀

月ぬえくもよのさくけの夏

芭蕉

旅人の股間ぬきく月流

大雀

ゆ石お泊

船もやしくけきさるけの月

芭蕉

舟

廿一

指よりあはる落たり蟬のしら

芭蕉

山中

旅人のふも死もせは蟬は夢

大雀

持積りのまゝくやうこせこの聲

芭蕉

蟬鳴り中降るあまのしづら雨

大雀

深さ中岩よりとせせみの声

芭蕉

あゆくやう根の蟬は色のあ

大雀

無常迅速

やうく死にゆくははる蟬の聲

芭蕉

あまの蟬のまゝ入ぬちるれ電

大雀

あまの蟬のまゝ

いてや我らも布あがり蟬のま

芭蕉

あまの蟬の袖よりすくや海の雲

大雀

蟬のまゝ

あまの蟬のまゝあふむ人の好む

芭蕉

あまの蟬のまゝあふむ人の好む

大雀

うづらきハハふの命より久し

大雀

四家

飯あふく嬉々ちきくわくをみ

芭蕉

涼くさ北ちききくやあのを

大雀

野原深志

すくくハハハ子足申の信也

芭蕉

漱石のそく涼くや藤の葉

大雀

涼くさ弦子くくくはの亦

芭蕉

新涼やあきく勇む小荷弦了

大雀

佐原の中山

いのちくわののさ北下きみ

芭蕉

移くの涼くきあのと河が

大雀

風瀑鏡子

高き山く小舟の中山く涼免

芭蕉

海子く濱み

月神く所ふもの書涼く水

大雀

碓氷白小月影やよるの中まきみ

芭蕉

伊豫松山の二層庵子病く

道のくまらぬか

涼くまらぬ子病くも蚊屋の月

大雀

十八樓

けあがり目子ん中もものく涼く

芭蕉

汲醒ヶ井清泉以宿其地

真景とある画小

月涼くあまむらゝの長女泣

大雀

居む沢清風亭

涼くまらぬ女宿くも病まの也

芭蕉

庵うの小庭よりそ暮以中か涼く

大雀

すくまらぬのこり月の影まの

芭蕉

涼くまらぬふ集るまの夏

大雀

あやまらぬ浦みくく夕まらみ

芭蕉

夕涼くつ乃樓ま子のこまらり

大雀

汗こしゆ 勢 野 ぬきこく 海 涼し

芭蕉

水み字の浦

えくあきとあ 動きある 涼し

大窪

茶の上漕くよきし 檜の老木

西行法師の記と名 涼のこま

夕晴や 檜み 涼む 浪の茶

芭蕉

涼と 終る 雲の 汗 涼む 足またり

大窪

小 鯛さく 檜 涼し 中 巻 巻 朝

芭蕉

茶のこま 中巻 檜の 涼し 其 巻

大窪

川 風や 檜 移る 中 巻 一 巻

芭蕉

雪や 芝の 巻 不 巻 終る 巻と

又 巻 枝つと 巻 巻 一 巻 一 巻

涼し 中巻 直子 望 杉の 枝の 形

同

風 香 杉 中巻 一 巻 上 川

同

檜 舟 洋を 巻る 小 船 檜 子 巻く

漁 舟を 巻る 小 舟 巻く 魚の

十重のるるのるる、海をよるる

こゝろあやしくもるる

涼しく中海に舞ふなぬ魚

大雀

風をまよひ舞ひに舞もつる魚

芭蕉

う浪中風のをまよひおかし

同

伊弉之津の濱にハ舞をく

夜廻の魚をよる。年々ハ津の

人々有てそく是を買ひみな

女商人ハ五品控へてゐるのふ

多岐舞をよる。こゝろを

まよひ商人をまよへてゐる

いふハある人ハ家をもよ

る。舞のいふハハかる舞

せよせよるをれをまよのし

いふハある人ハ家をもよ

る。いふハある人ハ家をもよ

とひけむ五呂控ハ沙領控

乃思候中とい時おりのひさう

もいとさうし共い新る乃

古雅ある事ありとみし

真涼

朝涼や砂子丁らるる以紙控

大雀

小倉山常之新るみ

お杉とほあうや風の草の音

芭蕉

宮

涼風は流ひよるまいつら

大雀

お山

有るお山をさうさうと申

芭蕉

月山

雲の峰つらつ山をみて月の山

同

雪のうき山々のふりも遠く見

大雀

湖や若さねふむ雪の山

芭蕉

雲の峯の如く山の上の如く

大雀

中向主馬の家名を稱す

雲の峯の如く山の上の如く

芭蕉

雲の峯の如く山の上の如く

同

馬をく

甲の如く

西

雲の峯の如く山の上の如く

大雀

蓮の如く

大雀

蓮の如く

同

ある人の如く

さ終る

うら

水の上

昔を著

うら

花のいろよく清くありけり

花の白くおのほろひて花のむ

東の原ふ花のさうらふ花のむ

夕の白くおのほろひて花のむ

夕の白くおのほろひて花のむ

夕の白くおのほろひて花のむ

夕の白くおのほろひて花のむ

夕の白くおのほろひて花のむ

大雀

芭蕉

大雀

芭蕉

大雀

芭蕉

大雀

山残の枝のむらさきむらさき

花の白くおのほろひて花のむ

花の白くおのほろひて花のむ

花の白くおのほろひて花のむ

花の白くおのほろひて花のむ

花の白くおのほろひて花のむ

花の白くおのほろひて花のむ

花の白くおのほろひて花のむ

芭蕉

同

大雀

芭蕉

大雀

芭蕉

子持のよりの海苔の皮むき

芭蕉

摺りけし子の甲もくまの皮

大雀

紙の皮むきつるるこまう終り

芭蕉

葉子ありぬるるも紙の皮むき

大雀

山陰やみきを煮るる紙の皮むき

芭蕉

くまの皮むきつるるこまう終り

大雀

神楽の葉にけしむ紙の皮むき

芭蕉

千紙をむきつるるこまう終り

大雀

花と葉と一度子紙の皮むき

芭蕉

夕も朝もつるるこまう終り

同

朝も夕もつるるこまう終り

同

折るる紙の皮むきつるるこまう終り

同

之道ふき

紙の皮むきつるるこまう終り

同

紙の皮むきつるるこまう終り

同

作山や朝の紙の皮むき

大雀

菫の葉を煮て茶にする

芭蕉

花も実も濃く煮て茶にする

大雀

根を山小豆と煮て茶にする

切り煮て茶にする

砂を山小豆と煮て茶にする

芭蕉

酔うと痛む拵子等の石の上

同

拵子小豆の煮たゆめ

大雀

正像 鐵肝石心此人情

拵子小豆の酒や拵子

芭蕉

拵子小豆の酒や拵子

大雀

拵子小豆の酒や拵子

芭蕉

大雀の流るる水

大雀

岐阜山

拵子小豆の酒や拵子

芭蕉

拵子小豆の酒や拵子

大雀

拵子小豆の酒や拵子

芭蕉

那須の温室の神の桐屋小

八幡宮をまつつゝ奉るる

両神一方小神意致ふ

湯を給ぬ物も同く岩清水

あかなる小菰の由や合若觀の也

お寺のいゝゝあゝゝあ深ハ

うら世のあゝゝ

きこゝれも西施の秘乃也

芭蕉

芭蕉

大窪

えいさき

等々お或日ハ乃れつま如く

大窪

子子のあまのりけるをせよ

き集の許ハ中集ハ

あまの少袖も乃れちり

芭蕉

中子ハ流も乃れもな古也

大窪

あまの成海も入り宮上川

芭蕉

乃れゝゝ若のめくもるあまの

大窪

田家

暑きころお鹽をとうりる地根紙

大雀

あけ月ハしく病やまの暑うか

芭蕉

牛の尾子暑く細うく小雀紙

大雀

堀紙より暑くち紙を切らす事

同

行者堂

夏山小足跡を移す首達紙

芭蕉

玄山のうらを根うく海の雲

大雀

お乃と雲物ゆる山紙通ひる事

大雀

山も庭も知さ入やま望友

芭蕉

おあふあゝるま子の白ひらふ

大雀

六月の暑ま入雲のる根紙

同

六月や嶺ふ雲たかく岩山

芭蕉

お月や鋪ハあまもも堪らうら

同

涼の毛乃上小消る根紙雲

大雀

涼の毛やまぬ山風をうら紙

同

岸のちや水通る菰おろく
大雀

岸のあやうく舟子とも
同

岸のうらうと岸さきぬえちれ
同

楳の實やちあき蝶の世終る
芭蕉

未竟亭

城の山日降るちも苔のち
大雀

岸の心藪の為るち風が柳
芭蕉

枯枝も春もえくひるくる
大雀

這おようひかたつれ蟻の聲
芭蕉

小樽を遊ぶ

うき婦のち作の子を人の家
同

或り一日一帯も鳴はね後る
大雀

眉刷毛を倚りしぬれ
芭蕉

掃やち人の顔ひよ紅のち
大雀

つくくも桜のち乃袖ちる
芭蕉

萱草のお寺をえくちる桐のち
大雀

桑の己白さうふりかた

厚くませせし薬の杖の杖のこ

芭蕉

百合の杖の杖の杖の杖

大雀

栗の杖の杖の杖の杖

いしは杖あり可伸といふ

葉の入りつゝぬむおれの葉

芭蕉

ふりぬ杖の杖の杖の杖

大雀

紫陽花の杖の杖の杖の杖

芭蕉

紫陽花の杖の杖の杖の杖

芭蕉

おのろの杖の杖の杖の杖

大雀

落抄を

柚の杖の杖の杖の杖

芭蕉

柿の杖の杖

白ゆきも作らぬ杖の杖の杖

大雀

駒六つ

旅人子も作らぬ杖の杖の杖

同

まの祖や岩さくゆい流物

芭蕉

竹の申道

ゆあよおとち竹のあひや

大窪

晋の測明とらむ

空形子空島の基やたむら

芭蕉

五老山平ふせう

おゆの帳子ぬてもあさう

大窪

雲山

空くおとこ子とてけりまの海

芭蕉

鴨の子は苔もあく水もむらり

大窪

あまらさーがふさうよお鮫の腸

芭蕉

菡のむね中らうさ藤のむらり

大窪

世のまお湖あまううぬ浪の上

芭蕉

月と山のあひのあ海将子色

大窪

一樹菴ふあふ

ゆきありの賀柏縁つる日流

同

よ〜〜花の〜〜ふむゆ〜
空の〜〜

野嶋よ草埔山の多よと終 大雀

不ト云好追悼

あ〜〜心〜〜道〜〜 芭蕉

華白〜ふ〜の〜平隈の松
〜世〜松〜鐵〜

松〜〜松〜二〜松〜二月〜 同

疎韻其室

春風の香屋涼〜や月の華 大雀

ほ〜〜ふす血子〜
つ〜〜を深〜 疎雲蒼ハ
何を延びる

春の種を透洞小深〜 芭蕉

美人帳帳乃卯〜
長き〜せるを〜

ゝゝ画小

字乃禁ハ〜〜さおるふぶり

大雀

形竊〜〜〜不備法也

こころ枯〜ハあ〜〜〜子と筆を

〜山あり〜四角の組柳

のり〜〜遠〜〜りたる蔓

おもむおもむり〜〜ては

藤の實ハ俳諧子世も茶のあと

芭蕉

草庵

雅あり〜〜書せる扇が

大雀

落梧のあり〜〜あ〜〜の枝

〜〜ひ〜〜の〜〜

〜〜人〜〜く〜〜も〜〜

芭蕉

病中自詠

髪のひ〜〜窓影を〜〜月向

同

燈の〜〜心〜〜や〜〜半

同

六月毎日熱病のりみきり

まがき

御 後河ふきハ流るのりつて 大雀

はまに二の巻也まのまて
あまのりまよめねい
まのまよめねい
まのまよめねい

まのまよめねい
まのまよめねい
まのまよめねい
まのまよめねい
まのまよめねい
まのまよめねい

懐仙堂大集

青於集全部五卷

一 樹菴楚山上梓

懷仙堂大巢校合

一之卷

春季

既出板

二之卷

夏季

既出板

三之卷

秋季

辰冬出板

四之卷

冬季

未巳春出板

五之卷

雜句文章類

未巳夏出板

